

ろ積極的に世界に向って発言すべきではないか。我々の側の知識なり、思想を持ち出すことよって、西洋思想に対する評価も変ってくる。そこで初めて本当に我々の伝統が世界的な意義を持ち得るのではないかと思ひ、特にこの二点を結論とした。

経典三学

金子 大栄

経典三学という題目で明らかにしたいことは、仏教の経典、ことに大乘経典を学ぶ態度に、三つの方式があるということ論じてみたいのであります。そして、この三つの方式が、互に協力することよって、仏教がことに明らかになるであろうと思ひ、本日、印度学仏教学大会が大谷大学で開かれたことを喜び、老学としての希望を述べたく思ひます。

第一に、経典は、我々に何を説き、何を教えるものであるかということでありませう。これは古来、仏教の宗とか体とかいふことで考えられてきたもので、法華経は諸法実相を体とし、華嚴経は法界縁起を説くことを主張とする。従って、こういう方法で経典を学ぶのは、伝統的なもの、本格的なものといえるのであって、私はこれを経典宗学と呼ぼうと思ひます。

第二に、その経典は、いつ、いかにして成立したのであるかということでありませう。それには、勿論、経典が何を説いているのかということも考えられているが、経典宗学とは別な面か

らみられている。それは極めて多方面にわたっているもので、今日、日本に行なわれている仏教の研究も、これに概括してよいと思ひます。従って、名前は少し狭いかも知れませんが、私はこれを一括して経典史学と呼びたいのであります。

第三には、その宗学や史学にも、当然、予想されていることですが、その経典というものは、どのように説かれているかということ、古来から教相というものにあたるものであります。しかし、今は、その教相というものを、もう少し広く考えて、その経典の表現方式を明らかにしようとするもの、これを私は経典文学と呼びたいのであります。

このように、経典宗学と経典史学と経典文学とに分けることができますが、しかし、この三つが全く別であるというのではなく、互に協力することよってのみ、本当に仏教が興隆するのであるという希望から、この題を出したのであります。

第一に経典宗学は、経典そのものの要求している学問であります。お経が「もし心あって、自分を学ぶなら、このように学んでほしい」と要求している学問であります。従って、経典は、広い意味では人間のあり方を明らかにするものであって、我々に確かな人生観、世界観を与えるものであります。そこから問題になるのは、それはやがて自覚につながるものであろうか、その自覚ということが、なぜ経典によらなければならぬかということでありませう。

これは、宗教と哲学の区別ということになるのでしよう。何ものにもよらずに、自覚から出発するのが哲学であるならば、

まずよき人の教えを聞き、それによって自分の道を考えていくとするのが宗教であります。この二つの生き方の相異と意味は、詳しくお話しする時間がありませんが、ともあれ、教えを宗とするところに經典宗学があるのであります。従って、仏教の用語を使えば、所謂「聞思」でしょう。まず聞くということ、そして、その教えを自分の生活に照らして思うていくということとであります。ですから、經典宗学は、經典によって自分の道を見出していくということにおいて、聞思の学でなければなりません。

従って、經典宗学は仏弟子の道であります。仏教を尊信し、その教えによっていくのであるから、始めから仏陀の弟子として学ぼうとする立場であります。そういう点において、經典宗学は信解の道であるといえます。涅槃經の迦葉菩薩品第三には、「善男子、若し人信心にして智慧有ること無ければ、是の人は則ち能く無明を増長す。若し智慧有りて信心有ること無ければ、是の人は則ち能く邪見を増長す」と説かれている。すなわち、智慧なき信心は無明であり、信心を無視して智慧だけで仏教を学んでいこうとすれば、邪見を増長する。

従って、宗学は、やがて見を破るためのものであるといえます。ですから、もし宗学そのものに我見が加わったならば、これは救うべからざるものであるといえます。

次に考えられますことは、經典宗学は、一生の学問であるということとあります。生命のある限り、もうこれで済んだということのないのが、經典宗学でなければならぬ。仏教の教えは身につけていかねばならないという、そういう点において、

經典宗学は、行証の道でなければならぬ。すなわち、宗学は一生を尽して学ばなければならぬものであります。しかし、それは学ぶべきものが沢山あるから、一生涯かかるということではありません。教えを身証していくという意味で、一生涯かかるというのであります。

しかも、それによって体験された真理は、極めて単純なものでなければならぬ。ですから、宗学の願いは単純なものである。ところが、誤まって複雑なものが宗学であるとすれば、それは、所謂、煩瑣宗学となるであらう。

第二に、經典史学は、自由研究である。すなわち、經典史学は、仏教によって人生を学ぶというのではなく、仏教を学ぶという意味のものであります。こういいますと、史学という名前は不適當かも知れませんが、今日行なわれている仏教の研究は、仏教を対象としての学問であるという点において、史学という言葉におさめていいのであらうと思います。その面で、仏教を対象とする学問の研究成果は、非常にはっきりしております。しかし、それを学ぶ立場というものが、どこまで明瞭になっているであらうか。そこに問題があるのであります。

日本の仏教学者と西洋の仏教学者を比べてみると、日本の仏教学者の発表には、何かもう一つ徹底しないものがあるのではなからうか。だから、經典史学は、如何に自由であるといっても、日本人の血の中には、伝統的な何かがあるにちがいない。それが、日本の仏教学会を形成しているものの中にあるのであるから、そういうことを反省して、もっとはっきりさせて

いかねばならないのではないかと思ひます。

かつて、ヤスベルスの「仏陀と竜樹」の日本語がでた時、ヤスベルスを訪ねたある日本の留學生に、その感想をたずねたさうであります。その時、學生は「先生のいわれることは、間違いないと思ひますが、仏陀と竜樹の精神はこれでいいのかと問われれば、疑問が残ります」と答えたら、ヤスベルスは、我が意を得たりという顔をして、「日本の仏教学者は、この書をほめてくれたが、君のいうことの方が正しいのであろう。僕は、宗教について色々論じるが、やはり最後はバイブルである。だから、日本にも何か伝統というものがあつて、結局は、そこへ帰るといふようなものがあるのではあろう。」といったさうであります。

従つて、我々は、經典史学の立場は何であるかといふことを、もっと明確にしなければなりません。たしかに、浄土教の世界思想的意義といふような、広い立場から浄土教をながめてみるのも、大いに敬意を表すべきことだと思ひます。しかし、仏教の學者が、いつでも広い視野をもつて、世界の文化を明らかにしようとしてゐるのであろうか。

ここで、私は、研究発表と調査報告とを区別してみたいと思ひます。だからといって、調査報告は、無用であるといふのではなく、大いに必要なものであります。しかし、調査報告は、如何に明細にせられても、やはり調査報告であつて、決して研究発表ではない。研究といふ二字は、義理を明らかにすることださうですから、研究と調査とは分限をはっきりさせて、混乱しないようにしなければならぬと思ひます。

ところで、經典宗學者も、決して史学を無視してはならぬのでありますが、しかし、史学には、史観といふものがなければならぬ。史観なくして、歴史を語ることはできないのであろうと思ひます。ですから、仏教の歴史が、原始仏教から大乘教、大乘教から浄土教といふ順序でのみ研究されるのではなく、それを逆にもみることもできるはずであります。我々に与えられてゐるものは、浄土教であるが、その浄土教の根底に大乘經典があり、その大乘教の根底に原始仏教といふものがある、といふようにみることができぬ。

歴史は、いつでも、今を始めとする道理によるものであります。それは、必ずしも一番最後のものだけが、正しいのであるといふのはありません。始めを以て終りを照らし、終りを以て始めをみていくところに、歴史が成立つてあります。そこで、始めと終り、すなわち、歴史を貫いてあるものを見出すものこそ、仏教の史学でなければならぬ。その意味で、仏教の歴史を学ぶといふことは、仏教を学ぶことであるといふことこそ、本當の史学であらうと思ひます。歴史は、時間と關係なくして考えることはできませんが、しかし、原始仏教から大乘教がでて、そこから浄土教がでてきたといふ考え方は、時間と名付けられる空間ではないでしょうか。それでは、本當の時間に即しての史観であるとは、いえないと思ひます。

このような意味で、正しい史観に立つて、經典史学が明らかにされるならば、我々の人間生活を、非常に豊かにするのであります。豊かにするとは、知識が多量であることをいふのではなく、精神生活がますます豊かになることをいふのであります。

いことがあり得るからであります。豊かとは、前に申した単純なるものが身についた時に、我々の学問がその単純さの内容となつて、豊かさを与えるものであることをいうのであります。

第三は、經典文学であります。これは、經典を文学的作品としてみるということではありません。仏教の教えは、表現でありますから、その表現を問題にしてほしいのであります。昔から教相といわれるものは、一つの文学的見方であるといえましょう。例えば、天台大師が五時八教といわれる場合、頓、漸、秘密、不定といわれるのは、經典の表現方式に着眼されたものであるといえます。

その表現ということで、ここに材料となるのは、大乘十二部經の説であります。この十二部經は、大きく教法と物語とに分けてみる事ができますでしょう。修多羅とか、重頌とか、仏自説とか、論義とかは、直接に教法を説くものである。これにたいして、因縁だの、譬喩だの、本事・本生だのということは、一括して物語であるといえましょう。勿論、これは一応の分類でありまして、十二部經は、みな修多羅でありますから、物語も教法も区別がなく、すべて教法であるという考え方があるにちがひありません。しかし、また他面からみれば、大乘經典は、すべて言いつぎ語りつがれたものであるという点において、物語であるといえるのであります。だから、教法も物語も、みな文学的な表現であるといえましょうし、したがってまた人間の思想表現に十二部あるといつてもよいのであります。

一般の思想表現の形式にも、詩篇とか、對話法とか、独語録、それに論文、隨筆等があげられます。このように、思想表現の方式は色々ありますが、そこには、それでないといふ表すことのできないものがあるにちがひない。例えば、華嚴經の真理は、一即一切であり事々無礙である。けれども、杜順や賢首の著書を読んで、それで本当に一即一切が体験できるかどうか。なるほど、華嚴經を読まなければ、一即一切ということにはわからない。しかし、その華嚴經が教えるところは、我々の日常生活にあるのだということは、入法界品の善財童子の物語を読まなければわからない。善財童子の物語があつて、始めてあの事々無礙の深い道理は、非常に高遠なことをいっているように、実は身近なことを物語っているのだということがわかるのである。そこに物語でなくては表すことのできないものがある。あるいは、また独語録に似た仏自説でなければ表すことのできないもの、譬喩因縁でなくてはどうしても説くことのできないようなものもある。こういうことに着眼して、その表現のよさというものを明らかにすれば、經典宗学や經典史学にも、うるおいを与え、豊かなものを与えるのではないかと思ひます。

然るに、現代では、經典の教法的部分は採用するが、物語的部分は信用しないということが行なわれているようです。しかし、弥陀の本願が、法藏因位の物語をぬいて本当に理解でき、悪人正機というような煩惱具足の凡夫の救われることが、觀無量壽經の説なくして領解できるのでしようか。

ここに思われますことは、涅槃經に「如来の所説は十二部經

なり、唯六部を信じて未だ六部を信ぜず、是の故に名づけて聞不具足と為す」と説かれていることであります。涅槃經に約せば、小説的部分や神話的部分が信じられないというのは、聞不具足であるといわなければなりません。教法的部分は受け入れるけれども、物語的部分は受け入れない、ということは、結局知識というものに偏して、物語のみの表わすまことというものを見失うことであろう。教法は如何に説き表わされても、教法によって知られるものは真理である。しかし、我々が經典から本當に聞きたいものは、単なる理論ではなくして、真実というか、まごころである。とすれば、そこには物語というものが非常に大切だということがある。

かつて、プラトンを讀んだときのことです。人間が、高台の上から海をながめている。そして、この海の底には、鰐だの、蛸だの、蟹だの、鯨だのというものが生存競争をしているのであらうとみる。それと同じように、空気の上には人間以上の生物がおって、そして、この空気の下には人間という動物がおって、勝ったとか、負けたとか、損したとか、得したとかいっているとする。そういうような生物が、空気の上にあるとしたら、諸君はどう思ふかという意味のことが書かれてありました。知識ある人間は、そんな馬鹿なというであらう。しかし、いやしくも理性あるものは、このようなことがあると信じなければならんといっております。この、よ。う。な。と。い。う。言。葉。で。も。つ。て、何。か。真。実。を。頭。わ。そ。う。と。し。て。お。る。の。で。あ。り。ま。す。私。は、ア。ン。デ。ル。セ。ン。の。童。話。を。讀。む。こ。と。を。好。み。ま。す。が、時。々「こ。れ。は。本。當。に。あ。つ。た。話。で。す。よ」とい。う。つ。ま。り、法。蔵。菩。薩。や。王。舎。城。の。話

でも、これは本當にあつた話ですよというところに、經典のよさがあるのであります。

このような、經典文學の表現の妙味を忘れて、思想内容だけをとらえようとするならば、それは知識的な間違ひを犯すことになるであらうでしょう。

以上のような、三つの學問が互に協力しなければ、仏教は世界的なものにもならず、純粹にもならないということを思うのであります。

私は、先年、大谷大学に立派な図書館が作られた時に思ひました。もし、もう二万年ほども生きておれるのなら、この図書館の本をみんな讀むのだが、と。惜しいことには、もうやがて死ななくてはならぬのですから、それは不可能であります。けれども、その不可能を可能にする道がある。それは、みんなして協力することである。調査する人は調査し、研究する人は研究し、文學的にやる人は文學的にやり、史學的にやる人は史學的にやって、そして、各々自分の域に閉じこもらず互に協力し合うならば、一人が二万年生きたのと同じものがでてくるはずである。こういうように、學問する人に大いに望みを託しているのであります。

さて、いろいろ話しましたが、結論として、ここに二つのことを申したのであります。

第一には、仏教の經典の學は、極めて單純なものであるが、同時に豊かなものでなくてはならないということであり、宗學の理想として、單純でなくてはならない。史學の与えるも

のは、豊かでなくてはならない。この単純であるということは、煩雑であることをきらうのであります。そして、豊かであるということは、知識が多量であるということとは違うのであります。知識が多量であっても貧しい人は、貧しいのではないでしようか。仏教の学問は、多く学ぶにしがって、ますます我々の精神生活を豊かにするものでなくてはならない。今日の仏教の学問は、ともすればその単純性を見失って、多量であることが豊かであるかのように思い誤まられているのではないであらうか。

それから、第二には、仏教の道理は、非常に高遠なものであり、最後には不可称、不可説、不可思議といわれねばならないものであらう。そういうような意味において、もっとも勝れた真理であるにちがいない。しかしながら、それは同時に、大衆性を持つものでなければならぬ。大衆性を持つということは、誰にでもわかるようなものでなくてはならないということとあります。但し、大衆性ということは、大衆向きということとは異なるのであります。ともすると、専門の学者には、大衆などには愚にもつかぬものだという人もあるそうですが、しかしながら、一切衆生悉有仏性であって、本来にまことを語れば石も鎮く。無学文盲であらうが、野蛮人であらうが、また原始人であらうが、語ればわかるというものでなくてはならない。しかも、それは決して、大衆向きのものではない。最も高貴なるものは、最も大衆性を持つものである。そういうことを、学問として頭わしていただきたいと思うのであります。

老学になりまして、あまり書物も読まなくなり、多くの方々

の研究発表もいちいち知らないで、随分、無鉄砲なことを申しあげたかも知れません。しかし、この年になりまして、日本の仏教学徒のお集りというような晴の舞台で、お話しをさせていただくことはもうありはしないのであります。とても、うれしいのであります。それで、はなはだ自分の思いのままを申して、或は、すまないことがあったかも知れませんが、ご静聴いただきましたことを心から感謝して、壇をおりにいたします。